

イングランド銀行について

神戸大学経済経営研究所
教授 井澤 秀記

ロンドンの金融街シティにある英国中央銀行、イングランド銀行(Bank of England)はご存知でしょうか。最寄りの地下鉄の駅はその名も Bank です。下の写真のように、正面から見るとギリシャ神殿を思わせる立派な破風のある建築です。スレッドニードル通りに面するため、イングランド銀行は「スレッドニードル(スレッドは糸で、ニードルは針)通りの老婦人」と呼ばれています。

さて、もし辞書がお手元があればこのイングランド銀行についてどう書いてあるか見ていただけませんか。私の持っているよく知られた辞書には、「ロンドンにある世界最古の中央銀行。1694年設立。...」と書かれていますが、これは間違いです。これを知ってもらうためにこのコラムを書くことにしました。1668年設立のスウェーデンリスク銀行が世界最古の中央銀行だからです。これは日本銀行のホームページ内の「教えて！にちぎん」にも載っています。出版社に問い合わせたところ、「中央銀行の設立年ではなく、中央銀行の主要な役目である中央銀行券の独占的発行特権という点で、イングランド銀行が1844年のピール条例(この言葉は辞書のなかにはないにもかかわらず)によって最古だから」という説明でした。しかし、これもまた違います。なぜなら、通貨の独占的発行ならオーストリア国立銀行が1816年で最古だからです。ちなみに、わが国の日本銀行の設立は明治15年(1882年)で通貨の独占的発行は翌年からです。なお、Capie, Goodhart, Fischer and Schnadt, *The Future of Central Banking*, Cambridge University Press (1994) appendix Bには、各国の中央銀行について設立順に説明があります。さて、辞書の編集者に電話をして、上記の文献も参照するように申しあげたところ、「執筆者も同意されたので、次の版では訂正します。」との回答をいただきました。広辞苑だけでなく、他の辞書もみましたが同様に間違っていました。産業革命から始まってイングランドは何でも世界で最初と思いこんでいるところがあるのかもしれませんね。辞書は正しいことばかり書いてあるものと疑いもなく読んでいましたが、こんなこともあるのですね。最後に、ネット上のフリー百科事典「ウィキペディア(Wikipedia)」も調べてみましたが、そこには世界最古の中央銀行とは書かれていませんでした。



(2005年4月末に筆者撮影)

イングランド銀行は、92年9月の欧州通貨危機に際して重大な局面を迎えました。ジョージ・ソロス氏率いるヘッジファンドがポンドを大量に売り浴びせ、イングランド銀行は

ポンドを買い支えられなくなり変動相場制度へと移行を余儀なくされました。これによりソロス氏は、イングランド銀行を「破産」させた男として名を馳せました。その後、イングランド銀行は、英国の金融政策の運営として「インフレ・ターゲット(目標)」を採用しました。消費者物価指数のインフレ率(前年同月比)の目標値(現在は2%)から上下1%を超えた場合に、総裁は公開書簡を財務相に送って説明する「アカンタビリティ(説明責任と訳されています)」を負っていますが、今年3月のインフレ率が3.1%となり初めて説明責任を問われました。5月には政策金利を引き上げるであろうという観測から、ポンド相場は急騰しました。

さて、日本では、デフレ脱却のためにインフレ・ターゲットをとるべきかどうか議論されたことがありましたが、導入までにはいたっていません。ユーロ圏の欧州中央銀行は、「2%以下でその近く」を物価安定の参照値(ターゲットではない)としています。米国では、バーナンキ議長がインフレ・ターゲットに前向きだということです。ともあれ、中央銀行はどの国でも国民の生活にとって重要な役目を担っているのですから、極端なデフレやインフレにならないように責任をもってやってもらいたいものです。(終)